特選

踏まれても此処がいいのとつくしんぼ

京町一丁目　川辺由子

（評）生まれ育った所への思いは、時が経つにつれてますます強くなってゆくであろう。たとえここでつらい思いをしたとしても、ご縁があって生を受け、命をつないできたここを離れることはできない。つくしんぼは擬人法である。（十九郎）

特選

一人ごと言うている内涙でる

鳥居本町　谷口繁子

（評）表現にたどたどしい点はあるのだが、作者なりの内省や孤独感の表出に飾り気がなく、読み手に訴えてくるものがある。類句、類想がなかったことも推す理由となった。（裕見子）

特選

生きているつもりだ種を撒いておく

堀町　河分武士

（評）撒いた種から芽が出て花が咲き実を付けるまで生きているつもりでいる。希望や夢があるのだ。しかし、「つもり」だから、運悪くすれば今日明日にも息が止まることも無いことはない。そんな思いが流れていて、笑うに笑えない、軽いようで重い句だ。（恒雄）

入選

生きているだけで幸せ花むしろ

大藪町　加藤佑子

（評）生きているということは、ありがたいことである。もちろん、生きている限りは多くの苦難を経験しなければならないであろう。しかし、それらを乗り越えてゆくなかで、生きている幸せを痛感することであろう。下五がよい。（十九郎）

入選

神様の真正面です炎天下

東近江市　河﨑章

（評）暑い暑い炎天下に立ち尽くしているのか。陽炎の中で参ったなあと思うとき、この試練のような状況は神さまの賜物だとしか思えない。「真正面」がのがれきれない厳しい状況を言い切っている。（恒雄）

入選

おしゃもじを苦手な手にも握らせる

古沢町　野洌令子

（評）「おしゃもじ」の具象（はっきりした形をもって表すこと）が良い。むずかしいことは何も書かれていないが、生きることへのひたむきな思いがあふれている。（裕見子）

入選

老いたれどひらりひらりと春を待つ

八坂町　森孝子

（評）「ひらりひらり」に作者の人生の信条のようなものがうかがえる。しかし、枯れてはいない。歳を取ることもわるくはないと言いたげである。定型に言葉をうまく乗せている。（裕見子）

入選

透き通る心に変える里の風

清崎町　柳本和子

（評）里への道を一歩一歩たどって行く。あたたかい風景が手招きするように近づいてくる。鼓動は次第に高まり、胸が熱くなってくる。里の風に抱きしめられて、体の芯からほぐされ、心はゆったりと濾過されてゆく。上五・中七がよい。（十九郎）

入選

春爛漫私まだまだ三分咲き

新海浜二丁目　森口ますこ

（評）満開の桜を眺めながらの感慨か。花はすでに盛りの極みだけれども、春は春。私は、年齢に関係なく、青春の真っただ中だ。またはまだまだ未熟者だ。これからの自分を見てほしい、いつかはこの花のように咲いてみせるぞという熱気があふれている。（恒雄）

佳作

矢印が空を指すので続けてる

平田町　竹内歌子

佳作

浮くための力を残し眠ります

地蔵町　大谷のり子

佳作

厨房に夫婦で作るカレーの香

須越町　島田洋子

佳作

空箱を捜し続ける夢の中

肥田町　藤野佐津子

佳作

宝石は要りませんすぐそこに夏

長浜市　宇野文代

佳作

庭先に亡母を感じる春の月

竹ケ鼻町　小椋きぬ子

佳作

何色の蝶になっても良い毛虫

大藪町　大塚しのぶ

佳作

それぞれの生き方こそがアートなり

極楽寺町　古川寛二

佳作　赤い実をつけて垣根もあったかそう
西沼波町　外海芳子

佳作　気が付くと仏間の夫は甘党に
鳥居本町　寺村美惠

佳作　春ですね歩幅を少し広げよう
日夏町　寺村保子

佳作　順調に老いているのがわかる日々
犬上郡多賀町　新谷清子

佳作　砂すくうやわらかでした波も波も
松原町　川村美栄子

佳作　やわらかい言葉と歩く春の道
鳥居本町　辻　久榮

佳作　伝言をいっぱい持って春の蝶
東沼波町　沼波ひろ子

佳作　満開の花が連れ出す杖二本
正法寺町　髙井　豊

佳作　心地好い風が私の味方する
三津町　森野成夫

佳作　台本を外れて暮らす二幕目
日夏町　島田輝子

佳作　夢が有る言葉の垣根越えた手話
東近江市　小林清次郎

佳作　ふらここや声かけあいてすれ違う
稲里町　藤野千枝子

《総　評》

生きることに希望や明るさなどを持ち続けようと自覚し、そのことを読者にも届けようとする作品が多くなったのは、厳しさを増してきた世相の反映であろう。

おのれの生き様、あるいは、体験から生まれた作品は、作り事のものよりも読者の心を打ち、心に深く沁み入り、共感を呼びやすい。

作者の個性と選者の個性が鎬（しのぎ）を削るとも言えるような選句の中で、作品の内容や表現に作者の努力を感じたとき、選者は、この上ない喜びに浸れる。

川柳作者が、彦根市、および、その周辺の地域にも次々と登場し続けて欲しいのが、私の長年の念願である。そのためには、われわれ川柳作者は、いろいろな機会を活用して、川柳作者を増やすことにさらに力を入れてゆかなければならない。

青　木　十九郎

彦根市民文芸に寄せられている句は、時事川柳や世事を面白く詠む川柳が少なく、作者の心や感情の変化が書かれている句が多くて、楽しく読むことができました。

選んだ上位の句には生きる力がみなぎっていて、しかし、ちょっと弱気がみえて、アカンかもしれんけどがんばるわという川柳味を感じました。

そういう句がもっとあれば良かったのですが、全般的には、軽妙さや機知を見つけ、表現の面白さに欠けている句が多かったなという印象です。難しいですがここで悩むのが創作だと思います。創作ですから、適当な味付けや、なるほどと思わせる嘘も必要であると思っています。

また、私小説というのがありますが、一般論ではなく、もっと私川柳を書いていただきたいと思います。他人にはまず経験できないような個人的なところを書いてほしいのです。共感できる、という時の共感は花は美しい、夏は暑いではなく、私にはそんな体験はないけどその思いはよう分ります、というものです。だから、全く私的な出来事を嘘もホントも誇張も比喩も混ぜて句にして来年も投句して下さい。

重　森　恒　雄

まず、熱心に作品を応募してくださった方にお礼を申し上げます。

現代川柳は「十七音字のドラマ」です。

自分の目や心で捉えたことを自分のことばで書いて発信します。前向きな作品をと思うあまり標語や人生訓のような句を書く必要はありません。また、まとまっていても新鮮味がなく型ばかりを整えた作品も選者の目には留まりにくいものです。作者自身の川柳観を選者にぶつけて問う、という姿勢が大切かと思います。ただしそれは難しいことを書くということではありません。

内容が優れた作品でも、表記や表現の誤りがあると川柳への心や応募の姿勢が問われます。知っている、わかっていると思うことばや文字であっても辞書を引き、形式面にも配慮がほしいものです。

これからも滋賀・彦根の豊かな文化を担うという自負を持って「私なりの一句」を書いてくださることを願っています。

峯　裕見子

選者吟

まだ夢を見ているのかと積まれた書

青木十九郎

青い花ばかりが乱れ咲く空き地

重森恒雄

柚子（ゆう）と呼ぶ母居て茶碗蒸しの湯気

峯　裕見子